



「サクラの回転」 (Akiyoshi Kitaoka, 2003)

サクラのはなびらが、内円と外円で逆方向にゆっくりと回転してみえる (作者の許可を得て掲載)

アートとサイエンスの融合

—北岡明佳錯視アート作品を川内北講義棟 A・B・C 棟に展示—

川内北キャンパスの全学教育講義棟 A・B・C 棟の各所に、「これは何だ！」と誰も驚きの声をあげる「錯視アート」が掲示された。うすい黄緑の背景に美しくピンクの桜の花びらがゆっくり回転する「サクラの回転」、紅葉した草原の奥に遠近感を持った光る沼があるように見える「秋の沼」、そのほか海外の学術誌の表紙や日本の雑誌の表紙にも使用された「蛇の回転」など。誰の目にも動いて見えたり、はっきり遠近面の分離が起こる絵なのに、じつは静止した平面の絵である。美しく、かつ劇的な効果をあげる錯視アートは、北岡明佳氏の作品。東北大学“豊かな感性・創造性を育むキャンパス”事業の一環である。古くから知られる、長さが違って見える矢羽図形の錯視（ミュラー＝リヤーの錯視）などは、北岡氏の作品群に比べれば子どもだましの錯視効果でしかない。

北岡明佳氏は、1961 年生まれ。アーティスト＆サイエンティストな動く錯視で世界的に知られる錯視アーティスト＆サイエンティストである。筑波大学生物学類卒業の生物学者としてスタートし、後に心理学者として筑波大学大学院心理学研究科博士課程修了（教育学博士）、錯視の創作と研究の第一人者となる。現職は立命館大学文学部助教授。2003 年第一回「今井賞」（錯視の館賞）受賞者。著書には、『トリックアイズ』（カンゼン 2002 年）、『トリックアイズ 2』（カンゼン 2003 年）、『Trick Eyes.』（Barnes & Noble 2005）、『現代を読み解く心理学』（丸善 2005）ほか。論文は、Kitaoka, A., Pinna, B., and Brelstaff, G. (2004). Contrast polarities determine the direction of Café Wall tilts. *Perception*, など多数。2004 年 9 月日本心理学会全国公開シンポジウム「嘘とだましの心理学—傷つける嘘・癒す嘘」併設展「北岡明佳錯視作品展」（仙台）、2005 年 7 月～9 月東京大学大学院総合文化研究科・教養学部＆自然科学博物館主催「錯覚展：心の働きにせまる不思議な世界」（東京大学美術博物館）など多数の展覧会において作品の展示が行われてきた。2005 年朝日新聞に「目の冒険」を 12 回にわたって連載、『*Journal of Neuroscience*』Vol. 25（2005）の表紙に作品「蛇の回転」が使われたほか、国内外の数多くの単行本やポスター等に氏の作品が使用されている。

なぜこのような効果が生じるのか、人間の視覚システムの不思議に対する学生の関心が高まり、知的好奇心が刺激されることが期待される。

こころよく作品の無料使用を認め、プリントにも協力いただいた北岡明佳氏には、深く感謝申し上げる次第である。なお、北岡作品の全貌は、ウェブサイトの北岡明佳氏のページ「<http://www.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/index-j.html>」で知ることができる。彼の言によれば、誰にも好評なのが「蛇の回転」で、「サクラの回転」は、なぜか 50 歳以上の人に評判が良い。自分のアート感受性年齢を知るためにも一覧をお勧めしたい。ただ、効果があまりにも劇的なために、目が回る感覚が強い場合は、眺めすぎないようにご注意を。

（解説：仁平義明・文学研究科心理学講座教授）